

出エジプト記29章 「祭司の任職」

1A 祭司の聖別 1-9

1B いけにえの用意 1-3

2B 装束への着替え 4-9

2A 罪と全焼のいけにえ 10-18

1B 罪のためのいけにえ 10-14

2B 全焼のいけにえ 15-18

3A 交わりのいけにえ 19-34

1B 血塗り 19-21

2B 奉献物の揺り動かし 22-28

3B アロンの子らの後継 29-30

4B いけにえの接食 31-34

4A 祭壇の聖別 35-46

1B 七日間のいけにえ 35-41

2B 主の会見 42-46

本文

出エジプト記29章をひらいてください。私たちは前回、祭司の装束について見ました。大祭司の装束が栄光と美を示しているとありましたが、それは大祭司なるキリストのお姿、その執り成しをされる姿であることを見ました。そして今回、29章は大祭司が聖所で奉仕の務めにあずかるために、その任職式を執り行う所に入ります。ここで忘れていただきたいくないのは、私たちキリスト者は、キリストを大祭司として仰ぎ、また自らも神に対する祭司であるということです。「I ペテ 2:4-5 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」主の祭司として生きるため、主に仕えるために、私たちもある意味で、任職式を受けるのです。主にお仕えるように召しを受け、任じられます。

1A 祭司の聖別 1-9

1B いけにえの用意 1-3

1 彼らを聖別し祭司としてわたしに仕えさせるために、彼らになすべきことは次のことである。若い雄牛一頭、傷のない雄羊二匹を取れ。2 また、種なしパン、油を混ぜた種なしの輪形パン、油を塗った種なしの薄焼きパンを取れ。これらは最良の小麦粉で作る。3 これらを一つのかごに入れ、そのかごと一緒に、先の一頭の雄牛と二匹の雄羊を連れて来る。

これから主はモーセに対して、アロンとその息子が祭司になるべくその任命式の手順を教えられ

ます。彼らに必要なのは「聖別」でした。何か自分が特別な能力を持つようになるためではなく、聖め別たれ、専ら主に仕える者になるためです。「聖別」というのは、「別たれる」という意味であり、いろいろあるものから、一つの用途のために分けられるということです。ですから、私たちが神の御心を行なうためには、これから何か特別なことを加えて行うのではなく、すでにあるものが精錬されることです。自分が他にやりたい野望、違う動機、意図などが、少しずつ自分の思いと心の中から取り除かれていくなかで、主の御心とその幻を見ることが出来ます。

具体的には、動物のいけにえと穀物のささげものを行ないます。祭司が幕屋において行う務めを、レビ記において詳しく見ることは出来ますが、ここでは祭司自身がその務めをするために行うことです。動物は、雄牛一頭、傷のない雄羊二匹です。穀物の献げ物は、パンですが、種なしのもの、油を混ぜた種なしのものであることが特徴です。

2B 装束への着替え 4-9

4 アロンとその子らを会見の天幕の入り口に近づかせ、水で彼らを洗う。5 装束を取り、長服と、エポデの下に着る青服と、エポデと胸当てをアロンに着せ、エポデのあや織りの帯を締める。6 彼の頭にかぶり物をかぶらせ、そのかぶり物の上に聖なる記章を付ける。7 注ぎの油を取って彼の頭に注ぎ、彼に油注ぎをする。

彼らはまず、祭司の装束を身に付けることによって任職式に入ります。その装束を身に付ける前に、天幕の入口の近くで水洗いをしなければなりません。そして水洗いをするのは、彼ら自身ではなくモーセが行います。

つまり、それはちょうどイエス様が弟子たちの足を洗われた時に似ています。あの時ペテロが、主が自分の足を洗われるのを非常に驚き、洗わないでくださいと言いましたが、イエス様は、「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もない。」と言われました。するとペテロは、「全身を洗ってください。」と言ったら、イエス様は、「ヨハ 13:10 水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」と言われました。

つまり、この水洗いというのは、水が表している御霊による清めのことを指しています。パウロはコリントの人たちが、いろいろ忌まわしいことを以前行っていたが、「I コリ 6:11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」と言いました。全身を水洗いすると同じように、御霊の洗いを受けることによって初めて、神の祭司として聖別されるのです。つまり、彼らは祭司の務めをする前に、救われていなければならない、ということです。

そして、装束を身に付けるという行為そのものも大事です。なぜなら、私たちは御霊によって新

しく生まれたり、新しい人になります。それは、あたかもキリストの着物を身に着けるようなものであり、自分の義ではなく、この方の義によって生きるからです。「エペ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」

そして、注ぎの油も受けます。これは少量あてがうのではなく、かなりの量を注ぎます。「詩 133:1-2 見よ。なんとという幸せなんとという楽しさだろう。兄弟たちが一つになってともに生きることは。それは頭に注がれた貴い油のようだ。それはひげにアロンのひげに流れて衣の端にまで流れ滴る。」この箇所の前に、兄弟たちが一つになることは、なんとという幸せなのだろう、ということが書かれていますが、これは潤いや恵み豊かさを表しています。

なぜ油を注ぐのか？再び、ご聖霊の働きの一つです。御霊はしばしば、命を与え、また洗いを与える時に「水」として形容されますが、油としても形容されます。「Iヨハ 2:27 しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。」それは、自分独りでは決してできない豊かな働き、祝福、そして恵みを人々に分け与える時に、ご聖霊がその能力を私たちに付与してくださるからです。ご聖霊の賜物を受けることによって、私たちは神に任された務めを、人々を潤す形で行うことができます。

8 それから彼の子らを連れて来て、彼らに長服を着せる。9 アロンとその子らに飾り帯を締め、ターバンを巻く。永遠の掟によって、祭司の職は彼らのものとなる。あなたはアロンとその子らを祭司職に任命せよ。

アロンが大祭司一人で、その息子たちは祭司として幕屋で使えます。長服のみであり、そして飾り帯です。そしてアロンが死ねば、息子の一人が大祭司を受け継ぎます。「永遠の掟によって」と書いてあるところが大事です。これから代々、何百年後もアロン家の末裔が大祭司を受け継いでゆきます。

ところが、一人だけ祭司と呼ばれているのに、アロン家の者ではない方がおられた、ということ。ヘブル書は記していて、メルキゼデクと呼ばれます。ロトを救出する戦いで戻って来たアブラハムに対して、サレムの王であり、神の祭司である方がアブラハムを祝福しました。この方が、とこしえに祭司であると詩篇では書かれており、ユダ族から出てきたイエスなのだという主張です。

2A 罪と全焼のいけにえ 10-18

次に、動物のいけにえを献げます。

1B 罪のためのいけにえ 10-14

10 あなたは雄牛を会見の天幕の前に近づかせ、アロンとその子らはその雄牛の頭に手を置く。
11 あなたは会見の天幕の入り口で、【主】の前で、その雄牛を屠り、12 その雄牛の血を取り、あなたの指でこれを祭壇の四隅の角に塗る。その血はみな祭壇の土台に注ぐ。13 その内臓をおおうすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓とその上の脂肪を取り出し、これらを祭壇の上で焼いて煙にする。14 その雄牛の肉と皮と汚物は宿営の外で火で焼く。これは罪のきよめのささげ物である。

アロンとその子らが祭司として聖別されるために必要な次の手順は、「罪のきよめのささげ物」を屠ることでした。自らが罪人であるという強烈な自覚がないかぎり、他の人々の罪のためのいけにえを捧げることはできません。「雄牛」を捧げなさいと主は命じられていますが、家畜の中でも最も高価な動物です。それだけ大きな対価がともなう罪を私自身が犯した、という意識がなければならぬのです。

ヘブル人への手紙 5 章に次のように書いてあります。「ヘブル 5:1-3 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。大祭司は自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知で迷っている人々に優しく接することができます。また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。」この「思いやる」という行為は、自分自身がその罪を犯しかねない弱い存在だ、ということをよく知っているから、できることです。

ですから、主のための働きをしたい人が聖別される時には、自分は罪人であり、神の憐れみによって赦されたのだという意識が芽生えます。パウロは、自分が以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者であった、ゆえに、「Ⅰテモ 1:15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世にいられた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と告白しました。

ところで、罪のいけにえの手順ですが、まず頭に手を置きます。「按手」ともしばしば言われますが、これは手を置いている対象と自分を一体化させる行為です。教会で誰かを宣教地に送り出すときに、祈って手を置きますが、それは、その人が宣教地にいても私たち教会は彼と一つです、という告白と祈りをしているのです。したがって、ここでは自分の罪がこの牛に転嫁したとみなす行為です。これからこの牛の首を掻き裂き、血があふれ流れ、それを祭壇の角につけ、残りを土台に流し、内臓を火で焼きます。これらを見て、自分の罪の対価はこのようなものなのだ、と自覚するのです。この牛が、自分の罪の身代わりになった、ということです。ゆえに、キリストの十字架は私たちの罪の転嫁であったのです。逆にキリストの義も私たちに転嫁されました。交換したのです。「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて神の義となるためです。」

そして罪のためのいけにえの特徴は、全焼のいけにえのようにすべてを祭壇の上で焼くのではなく、「雄牛の肉と皮と汚物」は宿営の外で焼きます。これはイエス・キリストがイスラエル人たちの住むエルサレムの町を出て、そこで十字架につけられたことを予め表しているものです。「ヘブル 13:12-13 それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。」

2B 全焼のいけにえ 15-18

15 また、一匹の雄羊を取り、アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置く。16 その雄羊を屠り、その血を取り、これを祭壇の側面に振りかける。17 また、その雄羊を各部に切り分け、その内臓とその足を洗い、これらをほかの部位や頭と一緒にし、18 その雄羊を全部、祭壇の上で焼いて煙にする。これは【主】への全焼のささげ物で、【主】への芳ばしい香り、食物のささげ物である。

用意している雄羊のうち一頭は、全焼のいけにえとして用います。全焼のいけにえは、今お話ししましたようにすべてを焼く、というところに特徴があります。そして、この出てきた煙が「芳ばしい香り」となるとありますね。つまり、バーベキューの香りです！主が、このいけにえを快く受け入れておられる、喜んでおられる、ということです。

主が喜ばれるのは、私たちが自分の一切のことを主にゆだねる姿、おささげる姿です。自分が、何ができるかという能力ではなく、「自分はここにいます。あなたが用いられたいように、どうぞお使いください。」という態度です。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

3A 交わりのいけにえ 19-34

1B 血塗り 19-21

19 もう一匹の雄羊を取り、アロンとその子らはその雄羊の頭に手を置く。20 その雄羊を屠り、その血を取って、アロンの右の耳たぶと、その子らの右の耳たぶ、また彼らの右手の親指と右足の親指に塗り、その血を祭壇の側面に振りかける。21 祭壇の上の血と、注ぎの油を取って、それをアロンとその装束、彼とともにいるその子らとその装束にかける。こうして、彼とその装束、彼とともにいるその子らとその装束は聖なるものとなる。

これから読んでいくと、この屠られる雄羊は、一部は、祭司が食べることになります。それで、「交わりのいけにえ」と呼ばれます。以前の改訂版ですと、「和解のいけにえ」と訳されていました。「平和のいけにえ」とも訳することができます。一部を食べることによって、神が食べ、自分自身も食べるということで、神と自分との食事のようなイメージ、つまり神と自分が交わることを意味します。

その前にその血を、このように彼らの体にあてがい、また装束に振りかけます。興味深いのは、右の耳たぶ、右手の親指、そして右足の親指に付けることです。「右」は聖書では権威を表します。ここでは「血によって、それぞれの器官を聖別している」ということです。

祭司が聞いていることが、他の一般の人々が聞いている声と異なり、主の御声のみを聞くことができるように、あらゆる雑音から、主が大切だと思われることだけを聞くことができるように、という願いです。そして、親指に血をつけるのは、自分の働きがいつも主の行っていることだけであるように、ということです。自分が主から離れて、自分の考え、自分の気持ちだけで行なっていることはないだろうか？ただ御霊の導きで行なっていることのみを行ないたい、という願いです。それから足の親指に血をつけるのは、「歩み」が聖別されるように、ということです。自分が歩んでいる道がはたして、主になつたものなのだろうか？自分が計画を立てている時に、自分が願っていることなのか、それとも主が願っていることなのか、それを確かめながら歩む、ということです。

そして祭壇にある血と油を装束につけるのは、つねにキリストの血と聖霊の油が自分を特徴づけているように、ということでもあります。

2B 奉献物の揺り動かし 22-28

22 次に、その雄羊の脂肪、あぶら尾、内臓をおおう脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓とその上の脂肪、また右のももを取る。これは任職の雄羊である。23 また、【主】の前にある種なしパンのかごから、円形パン一つと、油を混ぜた輪形パン一つと、薄焼きパン一つを取る。24 そして、そのすべてをアロンの手のひらとその子らの手のひらに載せ、奉献物として【主】の前で揺り動かす。25 それらを彼らの手から取り、全焼のささげ物とともに、【主】の前の芳ばしい香りとして祭壇の上で焼いて煙にする。これは【主】への食物のささげ物である。

交わりのいけにえの特徴は、豊かな部分、つまり脂肪ののっている部位を主に捧げます。「そういう脂がある部分が僕は好きなんだけれどもな。」と思う人はまさにその通りで、その豊かさを主にお捧げする、良質なところを主にお捧げする、ということです。そしてパンも共に捧げます。これらも、穀物にある命を主に捧げる、という意味です。

ここの「任職」と訳されているのは、直訳は「満たす」という意味です。ここに、右のももを含めた、雄羊の部位が書かれていますね。右腿以外は、脂肪のついている部位ですね、ももと言えば、ヤコブが御使いから太腿の関節を外された後で、「創世 32:32 イスラエルの人々は今日まで、ももの関節の上の、腰の筋を食べない。ヤコブが、ももの関節、腰の筋を打たれたからである。」と関わるかもしれませんが。それらの部位と、ここにあるパンですが、これをアロンの手のひらと、その子らの手のひらに一杯に満たします。そして、これらを主の前で揺り動かすのですが、これは祭壇の向かって前に動かし、また後ろに戻してくるという前後の動きをします。主にこれらを捧げますということです。そして、これらが主の前で芳ばしい香りとなりますが、主がこれらを喜ばれているとい

うことです。

26 アロンの任職のための雄羊の胸肉を取り、これを奉獻物として【主】に向かって揺り動かす。これは、あなたの受ける分となる。27 アロンとその子らの任職のための雄羊の、奉獻物として揺り動かされた胸肉と、奉納物として献げられたもも肉とを聖別する。28 それは、アロンとその子らがイスラエルの子らから受け取る永遠の割り当てとなる。それは奉納物である。それはイスラエルの子らからの交わりのいけにえの奉納物、【主】への奉納物であるから。

胸の肉は祭壇の上で焼きません。彼らの分け前となります。「交わりのいけにえ」と呼ばれる所以です。主に自分のすべてを捧げた暁には、主が食べているものと同じ動物を、自分も食べるという交わりをすることができる、ということです。この胸肉は奉獻物として揺り動かすとありますが、主から受け取ったものを感謝しています。

3B アロンの子らの後継 29-30

29 アロンの聖なる装束は彼の跡を継ぐ子らのものとなり、彼らはこれを着けて油注がれ、これを着けて祭司職に任命される。30 彼の子らのうちで、彼に代わって聖所で務めを行うために会見の天幕に入る祭司は、七日間、これを着る。

アロンの装束は、代々受け継がれていきます。そして任職式も新しい人が大祭司になる時に改めて行います。七日間、かかるようです。なぜなら、35 節以降にあります。祭壇の聖別に七日間かかるからです。

4B いけにえの接食 31-34

31 あなたは任職のための雄羊を取り、聖なる所でその肉を煮なければならない。32 アロンとその子らは会見の天幕の入り口で、その雄羊の肉と、かごの中のパンを食べる。33 彼らは、自分たちを任職し聖別するため、宥めに用いられたものを食べる。一般の者は食べてはならない。これらは聖なるものである。34 もし任職のための肉またはパンが朝まで残ったなら、その残りは火で燃やす。食べてはならない。これは聖なるものである。

これが胸肉の食べ方です。聖なる所で食べます。そして、他の人々は食べてはなりません。次の日に残ってしまっても食べてはなりません。食べると聖なる物になることができます。神の命にあずかるからです。またパンも食べます。パンも、いのちを表します。イエス様に自分自身を献げますが、その献げた体にはキリストのいのちが満ちます。イエス様は、「わたしはいのちのパンです。」と言われました。こうやって、罪を赦し、清めていただき、献身して、そして神との交わりをするということが、任職式の中に象徴されています。

4A 祭壇の聖別 35-46

1B 七日間のいけにえ 35-41

35 わたしがあなたに命じたすべてにしたがって、このようにアロンとその子らに行え。七日間、任職式を行わなければならない。36 毎日、宥めのために、罪のきよめのささげ物として雄牛一頭を献げる。あなたはその上で宥めを行い、その祭壇から罪を除く。聖別するためにそれに油注ぎをする。37 七日間、祭壇のために宥めを行い、それを聖別する。祭壇は最も聖なるものとなる。祭壇に触れるものはすべて、聖なるものとなる。

祭司のみならず、祭壇も聖めを受けます。これも七日間行うことによって、完全に聖別を受けるようにします。七は完全数を示しているからです。興味深いことに、祭壇のためにも、罪のための献げ物が必要だということです。祭壇に置かれて焼かれる物は聖なるものとなるために、祭壇そのものからも罪を取り除くということです。

38 祭壇の上に献げるべき物は次のとおりである。毎日絶やすことなく、一歳の雄の子羊二匹。39 朝、一匹の雄の子羊を献げ、夕暮れに、もう一匹の雄の子羊を献げる。40 一匹の雄の子羊には、上質のオリーブ油四分の一ヒンを混ぜた最良の小麦粉十分の一エパと、また注ぎのささげ物としてぶどう酒四分の一ヒンが添えられる。41 もう一匹の雄の子羊は夕暮れに献げなければならない。これには、朝の穀物のささげ物や注ぎのささげ物を同じく添えて、献げなければならない。それは芳ばしい香りのためであり、【主】への食物のささげ物である。

朝夕、それぞれ雄羊をささげますが、オリーブ油がまざった小麦粉も共にささげます。そして、「注ぎのささげ物」があります。これは命を捧げきったことを表しており、パウロが皇帝ネロによって死刑判決を受ける直前に書いたテモテ第二の手紙で、「4:6 私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。」と言いました。

2B 主の会見 42-46

42 これは、【主】の前、会見の天幕の入り口での、あなたがたの代々にわたる常供の全焼のささげ物である。その場所でわたしはあなたがたに会い、その場所であなたと語る。43 その場所でわたしはイスラエルの子らと会う。そこは、わたしの栄光によって聖なるものとされる。44 わたしは会見の天幕と祭壇を聖別する。またアロンとその子らを聖別して、彼らを祭司としてわたしに仕えさせる。45 わたしはイスラエルの子らのただ中に住み、彼らの神となる。46 彼らは、わたしが彼らの神、【主】であり、彼らのただ中に住むために、彼らをエジプトの地から導き出したことを知るようになる。わたしは彼らの神、【主】である。

主がそこまで徹底して、祭壇を聖別しなさいと言われた目的は、「その場所でわたしはあなたがたに会い、その場所であなたと語る。」そして、「その所でわたしはイスラエル人に会う。そこはわたしの栄光によって聖とされる。」そして、「彼らは、わたしが彼らの神、【主】であり、彼らのただ中

に住む」であります！シナイ山のふもとで、恐ろしい光景を見たイスラエル人は、こんなにも近くに神が近づいてくださるのです。それも、このような徹底した罪の贖いと聖めが行われたおかげです。主は同じように、生ける神として私たちに語ってくださいます。生ける主がイスラエル人に会ってくださいます。そして、彼らは神の栄光にまみえることができます。そして、主がイスラエル人の間に住んでくださいます。事実、彼らの神となってくださいます。